

先進国の人口推計国際セミナー

標記の人口推計に関する国際セミナーが、オランダのフールバークにあるオランダ統計局で1988年10月25日(火)から10月28日(金)まで4日間にわたって開催された。このセミナーはオランダ統計局、米国連邦センサス局、およびオランダ学際人口研究所、および国連ヨーロッパ経済委員会の4機関が共催したものである。会議にはアルファベット順で、オーストリア、ベルギー、ブルガリア、カナダ、チェコスロバキア、デンマーク、西ドイツ、フィンランド、フランス、ギリシア、ハンガリー、アイスランド、イタリア、日本、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、スイス、イギリス、米国、ユーゴスラビアの24カ国の専門家、国連人口部の代表(堀内四郎博士)、国連ヨーロッパ経済委員会の代表、そしてIIASAから3人の専門家と、全部で49人のエキスパートが出席した。

日本からは厚生省人口問題研究所の河野稔所長が出席した。これは、米国連邦センサス局の特別の要請によるもので、一つのセッションの議長に就任する含みで招待されたものである。また河野が国連人口部で長く人口推計課長を勤めた経緯もある。欧米諸国からの、日本で有名な専門家の顔振れとして、オランダの Frans Willekens 教授、Nico Keilman 博士(学際人口研究所)、米国の John F. Long 博士(センサス局人口推計課長)、イギリスの John Ermisch 博士、カナダの M. V. George 博士(カナダ統計局人口推計課長)の出席があり、久闊を叙した。

本セミナーの目的は先進国で行われている人口推計の方法、その手続き、基本的枠組の情報を持ち寄り、先進国の人口推計のインベントリー、つまり現在のノウハウと枠組についての一覧表を作ることが狙いであった。同時に、その中から、第1に現在非常に困難な状況にある人口推計の技術を前進させる技術的突破口を見出すこと、第2に現在各国がかなりバラバラに行われている中、高、低位の仮定の幅のとり方、出生率の将来推計方法、平均寿命の将来推計方法、国際人口移動の推計方法、推計の施行の頻度、推計をどのくらい将来までにやるか等の課題について、何か codification や standardization を得たいということ、つまり、一種の画一化と標準化を得たいという要望の達成が目的となっている。

以下このセミナーのプログラムを紹介したい。

第1日 1988年10月25日(火) 人口推計総論

議長: R. Verhoef オランダ統計局人口統計部長

セッション 1. 開会式 4機関の代表者

セッション 2. 人口推計の方法総論とそのアウトプット 基調論文: オランダ統計局 H. Cruijssen とオランダ学際人口研究所 N. Keilman 博士

セッション 3. 推計の正確性、モニタリング、評価 基調論文: 米国センサス局 John F. Long 博士

第2日 10月26日(水) 出生力分析と推計

議長: William Butz 米国センサス局人口担当次長(実際には John F. Long 氏が代理)

セッション 4. 出生率推計の人口学的方法 基調論文: オランダ統計局 J. de Beer 氏

セッション 5. 出生率推計の時系列法 基調論文: W. Bell 米国センサス局

セッション 6. 出生率推計の explanatory モデル 基調論文: John Ermisch 博士

セッション 7. 各国における将来出生率の仮定の比較 基調論文: ハンガリー国立人口研究所 K. Szabo 氏

第3日 10月27日(木) 死亡・移動の分析と推計

議長: 河野稔 厚生省人口問題研究所長

セッション 8. 死亡率推計の方法 基調論文: ノルウェー統計局 I. Texmon 女史と J. Gomez de Leon 氏

セッション 9. 各国死亡率推計の比較 基調論文: フィンランド統計局 H. Hamalainen 氏

セッション 10. 国際人口移動の推計方法 基調論文: カナダ統計局 M. V. George 博士

セッション 11. 各国国際人口移動推計の比較 基調論文: オランダ統計局 R. van der Erf 氏

第4日 10月28日(金) 総括と将来の協力

議長: John Kelly 国連ヨーロッパ経済委員会人口統計担当部長

セッション12. 人口推計技術の最前線 基調報告: F. Willekens 博士と John Long 博士

セッション13. 将来の協力と共同作業についてのコメントと示唆

以上の13のセッションを通じて感じたことを述べると、次のとおりである。

① 出生率の推計方法は最近非常に発達しており、特に Box と Jenkins が発展の糸口として開発した時系列法には多くの改良がみられる。しかし、いかんせんこの方法は機械的すぎる。もう一つの方法論的突破口は John Ermisch 等の出生力表とエコノメトリックスの方法を統合するものである。しかし現在行われている方法は、出生率が反騰したり反落したりする転換点を予測する技術に欠けているところである。今までの推計はこの転換点の予測に関して成功しているとは決して言い難い。そこで、いかに最新の出生力調査をいかに利用するかが鍵となっている。

② 死亡率の推計技術も、将来死亡率がどのくらいまでに低下するかの確固たる方法論的基盤がない。死因の分析を死亡率推計にいかにも利用できるかが鍵となっている。

③ 人口推計技術の最も発達しているのは米国であった。しかし、最近のオランダ統計局、学際人口研究所の人口推計に関する業績は目覚ましいものがある。地域推計、セクター推計の方法論の発展については、現在ライデン大学留学中の稲葉寿人口問題研究所員の感想によれば、オランダ人口学は日本のそれと比較し10年の長があるという。オランダ人口学、特に多相生命表の人口推計に対する応用技術をもっと学ぶ必要がある。

(河野稔果記)

多相人口学による測定・分析・予測に関する国際会議

表記の多次元人口学に関するワークショップが、去る1988年10月31日より5日間にわたり、オランダのユトレヒト市近郊の Zeist において、NIDI (The Netherlands Interuniversity Demographic Institute) とユトレヒト大学の共催により開催された。筆者は、今回のワークショップのオーガナイザーである F. J. Willekens 教授 (NIDI) の招きによってこれに参加する機会を得たので、若干その内容を報告しておきたいと思う。

今回のワークショップの目的は、多次元人口学および隣接領域におけるイノベーションをレビューし、様々な分野におけるその応用可能性を探ることであった。とりわけ、筆者としては Rogers と Willekens らによって開発された IIASA モデル以後の多次元人口推計手法の実用化の進展ぶりに深く印象づけられた。NIDI は改良された Rogers - Willekens モデル (MUDEA: Multiregional Demographic Analysis) によるオランダの州別人口推計を報告したが、理論のムダを省いた結果として、従来の IIASA モデルの地域数の上限11を大幅にこえる、44州の同時推計を実現していることはわが国の県別人口推計への適用可能性を考慮すれば、注目すべきことがらであろう。また Andrei Rogers はその基調報告の中で、パラメータ化された多次元人口推計手法を提案し、このパラメータを時系列解析によって予測するという新たな方向を示した。その他の方法論的に注目すべきこととしては、滞在時間効果などを明示的にとり入れて、heterogenous で、非 Markov 的な人口過程を扱うモデルや、多次元生命表作製の確率論的な基礎づけなどが提出されたことであろう。

ただ、多次元人口学の医学的領域への応用として予定されていた2つの講演 (Ken Manton, J. Duchene and E. Thiltges), 及び Jacques Ledent の家族数理人口学に関する講演がキャンセルとなったことが、はなはだ残念であった。

International Conference on Multistate Demography: Measurement,
Analysis, Forecasting, October 31 - November 4, 1988, Zeist, The Netherlands

Subnational Population Projection (Chair: Long, J.)

• Advances in Parametrized Population Projection

Rogers, A.